

雑がみ掘り起こしへ!

～紙リサイクルを取り巻く課題解決へ向けて～

第6回

未来社会を担う、
子どもたちのまなざしが教えてくれるもの

(公財)古紙再生促進センター
専務理事

川上正智



全国小中学生 紙リサイクルコンテスト

古紙再生促進センターでは、2009年より全国の小・中学生から作文やポスターを募る「紙リサイクルコンテスト」を毎年開催している。紙リサイクルの将来を担う子どもたちへの啓発を目的としたコンテストだが、コロナ禍の影響を受けたものの今年で第17回を迎え、昨年でも約3000件近い作品が当センターに寄せられた。これらは紙リサイクル

業界にとっても、全国の子どもたちの思いに接することのできる貴重な機会であるとともに、新たな気づきや反省などにも繋がっている。

本号では、家庭で発生する「雑がみ」に関する、子どもたちのさまざまな思いや意見について、その作文の記述から彼らの思いの一端を紹介するとともに、そこから浮かび上がる、紙リサイクル業界の課題についてまとめてみたい。

この紙、本当にみんなのかな?

ある子どもが、ふと抱いた思い。ランドセルの中に詰め込まれたプリント、読んだあとのカタログ、お菓子の箱やティッシュの外箱、普段は何気なく捨てていた紙を見つめながら、「これ、ほんとうに捨てていいのかな? リサイクルできるんじゃないかな?」と。「たったこれだけの紙だから、面倒くさいし、燃えるごみに捨ててしまえば良いでしょ!」その子は何度も、この言葉を耳にしたそうだ。しかしそれは、暮らしの中に埋もれていた「資源」の存在に、はじめて気づいた瞬間だった。リサイクルの意味を学ぶ中で、「なんでこれは捨てられるの?」「燃や

される前に、助けてあげたい」、そのやさしく真つ直ぐな思いが、ささやかな行動に繋がっていく。家では専用の袋をつくり、分別を始めた。家族を巻き込み、数日で袋はいっぱいになり、家庭のごみの量が目に見えて減った。「やってみると、意外と簡単だった」と、ある作文には素朴な驚きが記されている。

そこから、子どもたちの「伝えたい」が始まる。学校にポスターを貼り、友達に声をかける。みんなで回収を楽しむ。活動は、家族やクラス、そして先生たちをも巻き込み、小さな輪はやがて地域全体に広がっていった。多くの作文には、大きな展開のはじまりが、小さな気づきから生まれたことが描かれている。「ふつうにすてていたものが、実はリサイクルできる紙だった」。その目線は、数字では測れない深い洞察を内包している。

同じように、別の子どもたちは素直な気持ちで、このように書き記している。「おうちの人もへえ」って言ってくれたのが、なんだかうれしかった、「紙がまた使われるって思ったら、なんかほっとした」、「ありがとうって言われた紙もあるんだよ」、「お母さんが、燃えるごみが

減るから助かるって」、「一枚でも多くの紙がそつぎようしきをむかえられるといいな」、「この紙も、また誰かの役に立ちたいって思っているかもしれないよ」。また、ある子どもは、地域での啓発声かけを行った結果、集積所に多くの雑がみが集まり「わたしはついでにうれしくて、思わずガッツポーズをしてみました」、また古紙回収業者に遭遇し「いつもきれいにしてくれてありがとう」と声をかけられ、自らの小さな行為でも、その社会的意味合いを知った子供もいる。

これらの子どもたちの何気ない一言の重みに、大人たちは静かに立ち尽くす。我々が「資源」と呼ぶものを、彼らは「紙の気持ち」として見ている。そこには制度でも義務でもない、まっすぐなまなざしと暮らしの実感がある。「これは本当にみんなの?」というたった一つの問いが「分ける・集める」という実践につながり、さらには地域の変化へと波及していく。作文作品には、こうした小さなきっかけから始まる変化の力が詰まっている。

リサイクルは、義務やルールとして教えられるものではなく、気づきと共感から始まる営みである。わが

